

〉Tristan〈の愛の洞窟と〉Gregorius〈の贖罪の岩

小 澤 昭 夫

序

マルケ王によって宮廷から追放されたトリスタンとイゾルデは、およそ二日間の旅の後、山の中にある洞窟に至り、そこに居を定める。これが、「恋する人々の洞窟」der minnenden hol (16701)、すなわち「愛の洞窟」Minnegrotteである。

この洞窟の由来 — 異教徒の時代に巨人達によって岩を刻んで作られた — と、洞窟内部の構造 — 純白で滑らかな壁、大理石の床、明り取りの小窓、水晶の寝台、青銅の扉 — を述べたあとで、ゴットフリートは、この洞窟がある場所の風景を描いている (16730-60)。そこにあるのは、菩提樹の木、木陰、泉、花と草、鳥の歌、それに快い風である。つまりここには、クルツィウスが「ヨーロッパ文学とラテン中世」の第10章「理想的景観」の中で、「悦楽境」locus amoenusの道具立て¹⁾として挙げているものがすべて揃っているのである。この場所で恋人達は「理想の生活」wunschleben (16846, 16872) を送ることになる。

この風景描写のすぐ後には、しかし次のように言われている。

16761 von disem berge und disem hol
so was ein tageweide wol
velse ane gevilde
und wüeste unde wilde.
darn was dekein gelegenheit
an wegen noch stigen hin geleit;

「この山と洞窟から一日の行程の間は、岩だらけで緑野はなく、荒れ地と荒れ野ばかりあった。そこへ行くには道も小道もなかった」

愛の洞窟のある場所の周囲には、それとは対照的に荒涼たる自然が横たわっているのである。

一方、妻が母でもあるという事実を知ったグレゴリウスは、母に別れを告げ世を捨てて、海中²⁾に浮かぶ弧岩へと赴き、そこで贖罪の日々を送ることになる。この岩は繰り返し「荒涼たる」wilde と形容される岩³⁾であり、そこに登るのもそこから降りるのも容易ではなく、雨や風、霜や雪から身を守るものとしてない裸の岩である。それ故これは、トリスタンの愛の洞窟のある場所とは全く対照的な場所と言えるだろう。

トリスタンもグレゴリウスも、それぞれ愛の洞窟あるいは贖罪の岩での暮らしの後に、トリスタンは再びマルケ王の宮廷に帰り、グレゴリウスは教皇の後継者としてローマへと招かれるこ

小 澤 昭 夫

とになる。追放されるにしろ、自ら捨てるにしろ、それまで所属していた世界を去り外の世界に身を置いた主人公が、そこでの滞在の後に再びもとの世界に復帰するという図式が、愛の洞窟と贖罪の岩をめぐるエピソードには認められるようである。愛の洞窟と贖罪の岩を自然描写から見た場合の相違と、それらをより大きなエピソードとして眺めた場合の類似を手がかりとしてこれから二つのエピソードの意味を考察するのが小論の意図である。

1

トリスタンとイゾルデが居を定める愛の洞窟が、人里遠く離れた荒れ地の中にあることはすでに見たが、ゴットフリートによれば、これには深い意味がある。

17074 das man dem wol gelichen mac,
daz minne und ir gelegenheit
niht uf die straze sint geleit
noch an dekein gevilde:

「これは恋というものは大道にも広野にも転がっているものではないということのたとえであると見ることができる」

とゴットフリートは言うのである。愛の洞窟のある場所の周囲にある荒涼たる荒れ地というのは、これから考えるなら、この洞窟を人が容易には近付くことのできぬように隔離するところにその意味があるように思われる。グレゴリウスの贖罪の岩の場合には、この荒れ地に相当するのは岩の回りに広がっている海であり、さらにまた海辺に至るまでに彼がさ迷う荒野ということになるであろう。

愛の洞窟と贖罪の岩における主人公の存在を考える時、何よりも目につくのは、その場所が日常の世界とは異なる世界、現実には不可能なことが可能な世界だということである。そのことが端的に現れているのが食事の点であり、トリスタンの場合について言われる言葉を用いれば Speisewunder ということである。

トリスタンはマルケの宮廷を去るにあたり

16640 im selben unde Isolde
zir notdürfte unde zir lipnar;

「自分自身とイゾルデの必需品と食料を買う資金として」

イゾルデの金庫から金二十マルクを持って行く。しかし愛の洞窟での二人の生活については、意外なことに

16815 si sahen beide ein ander an,
da generten si sich van;

「二人は互いに相手を見ることによって身を養った」

とか、

16819 sin azen niht dar inne

wan muot unde minne.

「彼等はそこでは気持と愛情のみを食べた」

と言われているのである。つまりトリスタンとイゾルデは、日常の世界で必要とされる食物は一つ口にしていないのである。確かに二人は鳥や獣を相手に狩猟もするにはするが、それはただ

17268 me durch ir herzen gelust

und durch ir banekie

danne durch mangerie.

「食糧のためよりは、心の喜び、気晴らしのため」

であるに過ぎない。「二人の最上の食物」ir bestiu lipnar (16835)と言われているのは、「かぐわしい愛」diu gebalsemete minne (16831)なのである。このことについてコルプは「彼等の命の糧は物質にではなく精神にあるのだ」⁴⁾と述べているが、これは的確な指摘と言えよう。

岩の上のグレゴリウスが口にするものといえば、岩からにじみ出てくる水である。それは「いともささやかな湧き水」wazzers harte kleine (3124)であり、一日かかって漸く小さな窪みに一口分だけ溜るという僅かな量に過ぎない。これがグレゴリオウスの命の糧のすべてである。

ところで、トーマス・マンの小説「選ばれし人」は、ハルトマンの「グレゴリウス」に基づいて書かれたものであるが、この「選ばれし人」の中では、岩の上のグレゴリウスが口にするのはただの水ではない。ここでのグレゴリウスは、大地からにじみ出るミルク、大地の中に太古の時代から残っている滋養源によって生命を維持することになっている。その上マンは、グレゴリウス自身をも身体には苔が生え冬眠する小さな生き物にまで引き下ろしているのである。

この辺の事情をマン自身が「小説『選ばれし人』注釈」⁵⁾の中で語っている。それによれば、荒天に対して身体を保護するものは何もなく、岩からしたたる水以外にはどんな食物もなしに、裸の岩の上でグレゴリウスが十七年の歳月を過ごすのは不可能なことであり、そのため「明らかに不可能なことを、物語を現実化する際に用いることは、私にはできませんでした」とのことである。そうして「彼の贖罪の苦しさを軽減する」ことになるのは百も承知で、彼の飲み物と彼自身に対して前述のような変更を加えたのである。というのもマンにとっては「彼の徹底的な贖罪への意志」が決定的なものに思われたからである。

愛の洞窟における Speisewunder に対するコルプの言葉は、岩の上のグレゴリウスについても当てはまるように思われる。即ちグレゴリウスの命の糧は物質（水）にではなく精神、マンにとっても決定的なものに思われたという「彼の徹底した贖罪への意志」にあるのだと言えよう。

愛の洞窟も贖罪の岩も、普通の人間が普通の生活を送っている日常世界とは異なった場所、現実の世界とは異なる世界であり、パッチの言葉を借りれば「異界」the other world⁶⁾と呼ぶことができるであろう。

2

トリスタンもグレゴリウスも、そこでの滞在期間に差こそあるものの何れはこの異界を去っ

小 澤 昭 夫

て現実の世界へと戻って行くことになる。

トリスタンとイゾルデの場合には、かつて二人を宮廷から追放した当のマルケ王自身によって呼び戻されるのである。しかし彼等の宮廷への復帰は、追放されるその時から予め準備されているとも言えるのである。恋人達は宮廷を去るにあたって、ブランゲーネ（イゾルデの侍女、二人の忠実な味方）をマルケ王のもとに留めておくが、それは

16677 daz si die suone von in zwein
wider Marken aber trüege in ein.

「自分たち二人をもう一度マルケ王と和解させるため」に他ならない。更にまた、洞窟への二人の旅にはクルヴェナル（騎士で従者、少年トリスタンの家庭教師）ただ一人が随行し、二人が洞窟に落ち着いた後に再び宮廷へ帰って行くが、その時トリスタンから「二十日に一度ずつ」宮廷についての情報を持って二人を訪問するようにと命じられている（16733-803）。それ故トリスタンと宮廷との繋がりは、完全には断たれていない訳である。

これに対して岩の上のグレゴリウスは徹底して孤独である。両の足には鉄の足枷がはめられており、しかも足枷の鍵は、彼を岩まで案内して行った漁師によって海中深く投げ捨てられている。十七年後に魚の腹の中からこの同じ鍵を見出す時まで、この漁師は岩の上に置き去りにしたグレゴリウスのことなど思い出もしないのである。

それでもなおこの漁師の存在によって、グレゴリウスは辛うじて現実の世界との繋がりを保ってはいるのである。ローマ教皇の死去の後、その後継者をめぐって争いが続く最中、二人の経験豊富なローマ人に神のお告げが下る。人里離れた岩の上に十七年間座り暮しているグレゴリウスを次の教皇にするようにと。しかし、「男がそこにいることを知るものはひとりもおらぬ」（3182）というばかりで岩のありかははっきりとは告げられない。グレゴリウスの所在を探しあぐねた末にローマ人達は、例の漁師の住む海辺へとたどりつくのである。二人を岩の上のグレゴリウスのもとに案内して行くのもこの漁師である。

恋人達が愛の洞窟を去って宮廷に戻って行く際に、宮廷に戻るようにとのマルケ王の意向を伝える使者として洞窟へ出向くのもまたクルヴェナルである。かつて主人公達が異界へ赴く際に案内役あるいは随行役として登場した漁師とクルヴェナルが、そこから主人公達が現実の世界に復帰する時にも再登場するのであり、二人は異界と現実の世界との橋渡の役を果していると言えよう。

3

トリスタンとイゾルデは、愛の洞窟に至るまでに

16680 allez gegen der wilde hin
über walt und über heide

「森を通り荒れ野を越えて、終始荒れ地に向かい」

およそ二日間の旅をする（荒れ地を通り抜けるのに要する日数は、16682行では二日、16762行では一日で何故か食い違いが見られる）。

世を捨てたグレゴリウスもまた海辺に至るまでには、道を避け、広野を避けて「人の通わぬ荒野ばかりを」 *allez gegen der wilde* (2764) 飲まず食わずで三日間さ迷い歩く。「荒野」 *wilde* (= *Wildnis*) は、宮廷韻文ロマンの主要モチーフのひとつであり、騎士の「冒険」 *aventure* の理想的な領域である⁷⁾。騎士にとって「冒険」とは「彼に与えられるかあるいは彼が求める危険な出会い」⁸⁾である。そしてこの「冒険」はアウエルバッハによれば「試練と実証の手段」⁹⁾なのである。

ハルトマンの「グレゴリウス」の原拠は、12世紀末に成立したフランスの叙事詩「教皇グレゴワール伝」 *Vie du pape Grégoire* と推定されている¹⁰⁾。グレゴリウスの物語の中にある騎士的な要素については既に指摘されているところであり¹¹⁾、フランス詩人とそれに続くハルトマンは「宗教的な素材を、本来それには相応しくない形式、騎士宮廷叙事詩の形式にあてはめた」¹²⁾とのことである。従って、グレゴリウスについても、ここでこの騎士の「冒険」との関連で扱っても差し支えあるまい。

日数の差（グレゴリウスの場合には更に海辺から岩までの舟の旅が加わるが）はともかく、トリスタンとグレゴリウスは「荒野」を通り抜けて、愛の洞窟と贖罪の岩に、つまり「冒険」の場に辿り着く。違っているのは、そこでの主人公の「冒険」の意味と質である。

荒野をさ迷い歩いて海辺に出たグレゴリウスは、そこに漁師の小屋を見出し、一夜の宿を求める。素性を尋ねる漁師に彼はこう言う。

2955 *'herre, ich bin ein man*
 daz ich niht ahte wizzen kan
 mîner süntlîchen schulde
 und suoche umb gotes hulde
 ein stat in dirre wüeste,
 ûf der ich iemer müeste
 büezen unz an mînen tôt
 vaste mit des lîbes nôt.

「ご主人。私は計ることもできぬ大きな罪を負った男。神の許しを得られるよう、この荒野で、私に死の日の至るまで、この身になべての苦しみを負わせ、罪のあがないに徹したいと、場所を求めているのです」

既にトーマス・マンが認めていた罪に対する徹底的な贖罪への意志を、この言葉から聞き取ることができるであろう。グレゴリウスは自ら「危険な出会い」を求めているのである。そうして漁師が彼を導いて行く「荒涼たる」岩こそまさに「試練と実証」に相応しい場所であると言える。

グレゴリウスが後にこの岩を去ることも、彼の両足にはめた足枷の鍵を海中に投げ捨てた時

の漁師の言葉から理解できるであろう。もし鍵が深い水の中から再び見つかるようなことにでもなれば

3098 sô bist dû âne sünde
unde wol ein heilic man.

「お前さんは罪人どころか、聖者さまに違いない」

と、岩の上に置き去りにされるグレゴリウスに向かって漁師は断言したのである。そしてそれから十七年後この漁師自身が魚の腹の中にこの鍵を見つける時、彼の言葉の正しさが証明されるのである。贖罪の意志を認めた神の恩寵によって、グレゴリウスは罪を許されたばかりでなく、キリスト教世界の指導者たる人間にまで引き上げられたのである。逆にまた罪の自覚から、自らに贖罪という試練を課すことによって自己完成を遂げたのだとも言えるであろう。

「荒野」を通り抜けて「冒険」の場に至ると先に述べたが、愛の洞窟はしかし厳密には「冒険」の場とは呼べないようである。というのも「愛の洞窟は危険ももたらさなければ行動を求めもしない」¹³⁾からである。

ゴットフリートの「トリスタン」においては、恋人達が愛の洞窟に赴く経緯はベルールやアイルハルトの場合¹⁴⁾と全く異なっている。ベルールとアイルハルトの作における恋人達は、火焙りの刑を宣告され、処刑場へ向かう途中で逃亡し、「モロアの森」に落ち延びるのであるが、ゴットフリートの恋人達は愛の洞窟へ逃亡して行くのではない。彼等は宮廷の公の席で、マルケ王の意志によって平和的に追放されるのである。追放の宣告に先立つマルケ王の言葉は次のようなものである。

16599 sit iuwer liebe so groz ist,
son wil ich iuch nach dirre vrist
beswaeren noch betwingen
an keinen iuwern dingen.

「そなた達の愛はそうに強いんだから、わたしは今後はそなた達のことには強制も妨害もしようとは思わぬ」

これによって恋人達は、二人だけで思いのままに愛の暮しをする自由と保証を、他ならぬマルケ王自身から与えられた訳である。愛の洞窟とはまさに数々の障害を乗り越えた末に彼等が辿り着くことのできた楽園であり、そこで恋人達が「理想の生活」を送ることは既に見た通りである。

ベルールとアイルハルトの恋人達は、逃げ込んだ「モロアの森」で不自由な欠乏の生活を強いられる。パンを欠き、食べるものは獣の肉と草だけである。木の枝と蔓とで作った粗末な小屋で彼等は眠り、追手を恐れる逃亡の身であるが故に、一夜を過した場所を朝にはもう去って行くという具合で、決して一ヶ所に留めることは許されない。

この恋人達が「モロアの森」を去ることになる直接のきっかけは、媚薬の期限切れである。とはいってもこれは媚薬の効力の全面的な停止ではなく、力づくで作用する期間が終るということである。期限（ベルールでは三年、アイルハルトでは四年）に差こそあれ、恋人達をそれまで暴

力的に結び付けていた媚薬の効力が突然弱まるのである。

媚薬の期限が切れた時、アイルハルトの恋人達には森での厳しい生活がこれ以上は耐え難いものに思われるのである。ベールールの場合では、その時トリスタンを襲うのは後悔の念である。騎士の道を忘れていたこと、伯父を裏切らなければどれだけ伯父から愛されたか、本来ならばイゾルデは美しい部屋で侍女達にかしずかれているであろうこと、を痛切に感じるのである。そうした後、森の隠者の仲介によってトリスタンはイゾルデをマルケ王の手に返し、自らはマルケ王の領国を追われることになる。

ゴットフリートは媚薬に期限を設定してはいない。従って恋人達が愛の洞窟を去るのは全く別の事情からである。マルケ王が自発的意志によって恋人達を宮廷に呼び戻すのである。洞窟の寝台の上で抜き身の剣を間に置いて — 通常これは潔白の象徴である — 睡眠中の二人の姿を覗き見て、マルケ王は二人の無実を確信するに至るからである。しかしここで、かつて「灼鉄の裁き」という神明裁判によってイゾルデが無実を証明し得たにもかかわらず、二人を宮廷から追放したマルケ王が、今また二人を呼び戻すのは如何にも不自然に見えるのだが、ゴットフリートは納得のいく説明を与えてはくれない。

それはともかく、恋人達が愛の洞窟を去る理由は、マルケ王の意志に、二人の愛に対する疑いと無実の確信との間を常に揺れ動いている「無定見な男」*der wegelose man* (17533) であるマルケ王の側に求められよう。しかし抜き身の剣というのは、トリスタンの策略だったのである。森の中に響く角笛と犬の声を聞いて

17403 hier über vant Tristan einen sin
dar an gevielens under in :

「万一に備えてトリスタンが一案を思いつき、それを二人で実行に移した」と言われているその「一案」が抜き身の剣を二人の間に置いて眠ることだったのである。たとえ音に聴いただけとはいえ狩の一行が、つまりは現実の世界が恋人達の生活圏内に侵入してきた瞬間に、再び彼等は欺瞞の手段を用いるのである。

トリスタンの勇敢な行為は、モーロルトとの決闘も竜との戦も「イゾルデとの出会いのための梃子、トリスタンのイゾルデへと至る道の上での歩みにすぎない」¹⁵⁾というデ・ボーアの言葉が正しいとすれば、トリスタンの冒険とは本来愛の「冒険」であり、それは詰まるところマルケ王を欺いてイゾルデとの密会を重ねることであると思われる。愛の洞窟においてはマルケ王がもはや恋人達にとっての障害とはなり得ぬ（前出16599-602行）以上、「冒険」の生ずる余地はないと言えよう。

4

恋人達が処刑寸前のところを逃亡するのではなく、マルケ王自身の意志で追放されるのであり、しかも恋人達が宮廷からの追放を「さしたる困却も心痛もなしに」*mit maezlicher not, mit küelem herzeleide* (16624f.) 受け入れる一因にゴットフリートと同じくトマの作を原拠とする＞

小 澤 昭 夫

Saga<と>Sir Tristrem<では、恋人達は大喜びで宮廷を去って行く一のであるから、恋人達の赴く先が、マルケ王の追求の手から庇護してくれるような未開の森である必要はない。媚薬の効力に期限を定めもしないのであるから、期限が切れるや否や耐え難いと思わせる程辛く厳しい生活を強いるような森である必要もない。恋人達の森の生活というエピソード自体がむしろ余計なものとさえ成り得るのである。しかし恋人達の森の生活は、トリスタン物語の素材の確固たる構成部分である。ここにこそむしろ吟遊詩人風異本（ベールール、アイルハルト）のとは異なった愛の解釈を示す余地があったと言えよう。本来人間に敵対する未開の森と草ぶき小屋をその対照物、牧歌的な風景と洞窟に置き換えることによってである。それを行ったのがトマであり、彼は姦通恋愛の罪（ベールール）に神の掟にも人倫の掟にも支配されない宮廷風ミンネを対置したのである¹⁶⁾。

トマが示したような特徴をゴットフリートは猶一層強調したのである。その際彼が厳密に従ったのが locus amoenus の伝統であり¹⁷⁾、四度に渡って（16730-60；16878-95；17147-81；17347-93）彼は楽園のような悦楽境を描いている。ゴットフリートが愛の洞窟の地を描くにあたって悦楽境の傾向を強める時、それは既にトマが呈示した恋愛観を一層際立たせることになったと言えよう。locus amoenus とは「ただ悦楽にのみ役立つ場所」¹⁸⁾だからである。

「高貴なもの、偉大なもの、重要なものは卑近な現実にも求めべくもないという考えは、ヨーロッパでは久しく効力を持っていたが、宮廷文化において顕示された」¹⁹⁾とアウエルバッハは述べているが、愛の洞窟と贖罪の岩をめぐるエピソードもその一例とみなすことができるように思われる。

愛の洞窟がひとり寂しく荒涼たる荒れ地にあることを、ゴットフリートが恋の道の陰しさにたとえるとき、そしてまたグレゴリウスの所在を探しあぐねた二人のローマ人に

3220 solden si iemer vinden in,
daz man in danne müeste
suochen in der wüeste.

「あの男を探すなら、荒野に求めねばならぬ」

と神から暗示が与えられる時、その背後にあるのは「高貴なもの、偉大なもの、重要なものは、卑近な現実には求めべくもない」という考えであると思われるからである。卑近な現実の埒外にあるものこそ愛の洞窟、贖罪の岩であり、異界なのである。

しかし異界、日常の世界とは異なる世界に主人公が留る限り、物語は静止し発展性がないことは明らかである。非日常性を日常の進行に呼び戻して物語に発展性を与えること、つまり主人公の現実世界への復帰ということが是非とも必要なことと思われる。それと同時に異界と現実世界とを仲介する者の存在もまた不可欠である。

グレゴリウスは岩の上で徹底した贖罪の17年間を過ごす。それ故恩寵は、彼の贖罪への意志を認め、この罪人を再び人間に、それどころかあらゆる人間の上に高めたのである。それはまた彼が罪の自覚によって自己完成を遂げたことでもあると言えよう。贖罪の岩とは、「罪の自覚による人間の高貴化」²⁰⁾が行なわれる場なのである。

媚薬に力づくの作用を認めず、従って効力の期限も定めない — トリスタンとイゾルデに意志の自由を認める — 以上、ゴットフリートの恋人達が、悦楽境での「理想の生活」を捨てて宮廷へ、即ち非日常の世界から現実の世界へ戻って行く理由は本来無い筈である。しかし二人の無実を信じた（抜き身の剣によって）マルケ王の自発的意志によって、恋人達は宮廷へ呼び戻されることになる。

第二章で見たように、恋人達は宮廷を去るにあたり、マルケ王との将来の和解に備えてブランゲーネを宮廷に留めておき(16661f.)、かつまた洞窟への旅にはクルヴェナルただ一人を同行させ(16654)、二十日に一度ずつ二人を訪問するようにと命じたのである(16773ff.)。ブランゲーネについての言及（それ以前の16631-37も含めて）は、そもそも原拠には見られず、ゴットフリートが付け加えたものである²¹⁾。さらにトマが後になって初めて唐突に登場させるクルヴェナル²²⁾を、ゴットフリートは既に恋人達が宮廷を去る場面で登場させ、二人に同行させているのである。そうして見ると、原拠に対して彼が加えたこの変更は、媚薬の期限を定めないということ — 恋愛観の相違 — から必然的に生じてくる物語の構成上の不都合を充分承知の上で、異界から現実世界への恋人達の帰還を理由づけようとして為されたもののようである。それに完全に成功したかどうかは別にしてゴットフリートが物語を少なくともトマ以上に合理的に語ろうとしたことは確かである。

（小論は、日本独文学会1984年秋季研究発表会での口頭発表をもとにして加筆修正を施したものである。）

テキスト

Gottfried von Straßburg: Tristan und Isold. Hrsg. von Friedrich Ranke. ¹⁴1969.

Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein hrsg. von Peter Ganz. 2Bde. (Deutsche Klassiker des Mittelalters. Neue Folge Bd. 4) 1978.

Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3Bde. (Reclams Universal-Bibliothek 4471-3)

Hartmann von Aue: Gregorius, der „gute Sünder“. Hrsg. und erläutert von Friedrich Neumann. 5. Auflage besorgt von Christoph Cormeau. (Deutsche Klassiker des Mittelalters. Neue Folge Bd. 2) 1981.

Hartmann von Aue: Gregorius, der gute Sünder. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Friedrich Neumann, Übersetzung von Burkhard Kippenberg, Nachwort von

Hugo Kuhn. (Reclams Universal-Bibliothek 1787)

Hartmann von Aue: Gregorius—Der arme Heinrich. Text, Nacherzählung, Wort-
klärungen. Hrsg. von Ernst Schwarz. 1967.

原文の引用は、Ranke 版 (Tristan) と Neumann 版 (Gregorius) に従った。行数は冒頭に記し、地の文中では引用に続けて () で示した。

引用の原文に付した邦訳には、下記を使用させて戴いた。

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、石川敬三訳「トリスタンとイゾルデ」郁文堂、昭和51年 (1976)

ハルトマン・フォン・アウエ、中島悠爾訳「グレゴリウス」「ハルトマン作品集」郁文堂、昭和57年 (1982)

注

- 1) Curtius, Ernst R.: Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter. ¹⁰1984. S. 202.
E. R. クルツィウス、南大路・岸本・中村訳「ヨーロッパ文学とラテン中世」みすず書房、281頁「locus amoenus (悦楽境) は——ローマ帝政時代から16世紀に至るまで、あらゆる自然描写の主要モチーフをなしている。—— locus amoenus はうるわしい、日蔭のある寸景であって、その最小限の道具立ては一本 (もしくは数本) の樹木、草地、泉もしくは小川である。これに鳥のさえざりと草花がつけ加わることもある。もっとも豊かな仕上げでは、さらに微風がつけ加わる」
- 2) sêは男性名詞として用いられているが、中高ドイツ語ではまだ性による意味の区別をしないので、「湖」とも「海」ともとれる。以下邦訳に合せて「海」としておく。
- 3) er ist dir genuoc wilde (2985) ûf jenen wilden stein (3087)
ûf dem wilden steine (3103, 3138, 3355, 3405)
ûf einem wilden steine (3180) ûf den durren wilden stein (3247)
ab dem wilden steine (3659)
- 4) Kolb, Herbert: Der Minnen hus. Zur Allegorie der Minnegrotte in Gottfrieds Tristan (1962) In: Gottfried von Straßburg. (Wege der Forschung, Bd. 320) Hrsg. von Alois Wolf. 1973. S. 322.
- 5) トーマス・マン、滝沢弘訳「小説『選ばれし人』注釈」「トーマス・マン全集」VII 新潮社、1972年 557-560頁。
- 6) ハワード・ロリン・パッチ、黒瀬、池上、小田、迫共訳「異界—中世ヨーロッパの夢と幻想」三省堂、昭和58年。
原著は、
Patch, Howard Rollin: The Other World. According to Descriptions in Medieval Literature. 1950.
- 7) Gruenter, Rainer: Das wunneclike tal. In: Euphorion 55 (1961) S. 372.
- 8) Gottfried von Straßburg: Tristan. Text, Nacherzählung, Wort- und Begriffserklärungen von Gottfried Weber in Verbindung mit Gertrud Utzmann und Werner Hoffmann. 1967. S. 827.
- 9) Auerbach, Erich: Mimesis—Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur. (Sammlung Dalp, Bd. 90) 1977. S. 131.
E. アウエルバッハ、篠田、川村訳「ミメシス—ヨーロッパ文学における現実描写 (上)」筑摩書房、1975年 149頁。

- 10) Wapnewski, Peter : Hartmann von Aue. (Sammlung Metzler Bd. 17) 1979. S. 92f.
- 11) 例えば、
Sparnaay, Hendrik : Das ritterliche Element der Gregorsage (1920) In : Hartmann von Aue.
(Wege der Forschung, Bd. 359) Hrsg. von Hugo Kuhn und Christoph Corneau. 1973. S. 7-16.
- 12) Wapnewski, a. a. O. S. 92.
- 13) Boor, Helmut de : Geschichte der deutschen Literatur. Von den Anfängen bis zur Gegenwart.
Bd.2 : Die höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang. '1960. S. 139.
- 14) ベルルールとアイルハルトの作については下記を参考にした。
佐藤輝夫「トリスタン伝説—流布本系の研究」中央公論社、昭和56年
新倉俊一「モロアの森の恋人たち」「ヨーロッパ中世人の世界」筑摩書房、1983年
Ehrismann, Gustav : Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters,
Zweiter Teil : Die Mittelhochdeutsche Literatur, II : Blütezeit, erste Hälfte, unveränderter Nach-
druck 1954, S. 65-78.
Vogt, Friedrich : Geschichte der mittelhochdeutschen Literatur, I. Teil, '1922. S. 116-128.
Ruh, Kurt : Höfische Epik des deutschen Mittelalters, I. Teil. Von den Anfängen bis zu
Hartmann von Aue. 2., verb. Aufl. 1977. (Grundlagen der Germanistik 7) S. 46-55.
- 15) Boor, a. a. O. S. 136.
- 16) Gruenter, a. a. O. S. 352.
- 17) Krohn, Rüdiger : Tristan. (Reclams Universal-Bibliothek) Bd. 3 : Kommentar, Nachwort und
Register. S. 160f.
- 18) Curtius, a. a. O. S. 199. 邦訳277頁.
- 19) Auerbach, a. a. O. S. 138. 邦訳154頁.
- 20) 佐藤晃一「選ばれし人」解説「現代世界文学全集27」新潮社、昭和28年.
- 21) Krohn, a. a. O. S. 156.
- 22) Tax, Petrus W. : Wort, Sinnbild, Zahl im Tristanroman. Studien zum Denken und Werten
Gottfrieds von Straßburg, 1961. S. 118.